研究会報告

『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』研究会

「台湾神社の創建と祭典時の催し物の変容」

日時：2012 年 5 月 26 日（土）15:30 ～
場所：神奈川大学横浜キャンパス 9 号館 51 室

金子　展也（非文字資料研究センター研究協力者）

I　台湾神社の創建

明治 28 年（1895 年）11 月 5 日、宮内省告示第 15 号により北白川宮能久親王の薨去が発表された。領台当初の明治 30 年（1897 年）9 月 1 日、第 3 代乃木総督は、台南で薨去した故北白川宮能久親王を祀る神社建設の為に故北白川宮能久親王神殿建設取調委員会を設け、神社造営位置の選定、神社設計および費用予算を編成する一方、その設計を内務省に嘱託した。建立地は台北・基隆および台南が候補として挙げられ、最終的に台北が選ばれ、しかも当時の城外である圓山が選定された。しかしながら、乃木総督の転任となり、明治 31 年（1898 年）、第 4 代兒玉総督の時代に圓山から劍潭山に変更された経緯がある。やはり、劍潭山の位置はその威厳を示し、台北の地を一望できる場所であったからであろう。

そして明治 33 年（1900 年）7 月 14 日、兒玉総督による「臺灣神社社格及社号之儀ニ付稟申」が内務大臣侯爵西郷従道宛に出された。「別格官幣社を臺灣に建設する建議案」が同年 9 月 18 日に衆議院で可決し、同日に西郷内務大臣より内務省告示 81 号が告示され、台湾神社は官幣大社台湾神社として創建されることが決まった。これにより、東京帝国大学教授伊東忠太の設計により、大国魂命、大己貴命、少彦名命を一座、能久親王を一座として 155,900 坪の神社敷地面積を有する台湾神社の造営と基隆川の架橋を含め総工費 356,358 円の大工事に向けて大きな拍車がかかった。能久親王薨去である 10 月 28 日を鎮座日と設定され、約 2 年半に渡る造営工事の末、明治 34 年 10 月に台湾の総鎮守としての官幣大社台湾神社がついに竣工した。

II　台湾神社大祭（明治 34 年 10 月 27 日：鎮座式、10 月 28 日：例祭）

(1)　勅使宮地掌典と式典に参加した北白川宮能久親王妃殿下および縁故者

明治 34 年 10 月 27 日、勅使として朱の直衣に紫の袴を身に付けた宮地掌典は、西警部長及び警部数名に護衛され、掌典補および禰宜数人を従えて馬車にて台湾総督府に到着。斎館に入り、御霊代を奉じて退出、三柱の

写真 1　往時の台湾神社

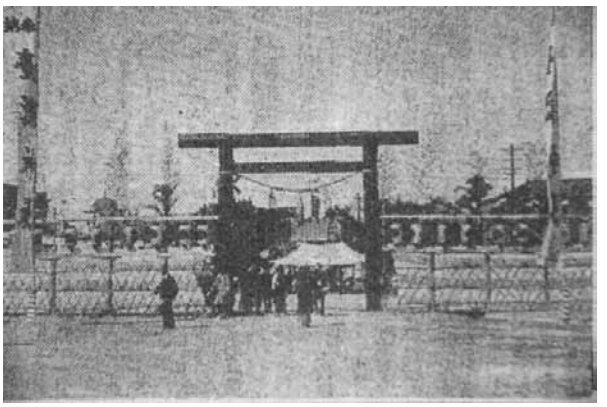

写真 2　台北市公会堂前の遥拝所
（出典：昭和 12 年 10 月 28 日　台湾日日新報）

神霊は白丁が奉じ、北白川宮能久親王の御霊代は掌典が奉じた。一方、北白川宮能久親王妃殿下は、白洋装の礼装に、勲一等寶冠章の綬を帯び、馬車に乗り、伊達侯および北白川宮成久殿下代理田中健三郎の同乗する馬車と共に出門。騎兵一中隊および警官が警衛し、神社に向かった。

台湾神社第一鳥居外の左側には、徳川家達公、伊達宗徳爵侯、清棲家教伯、徳川達孝伯、久松定謨伯、乃木希典男爵、徳川頼倫、本田康虎、恩地轍等の各縁故者を始め、大森内務総務長官、其の他在台湾文武高等官等大礼服正装または正服で並んだ。一方、右側は外国領事、貴衆両院議員、従6位勲6等以上の者、各団体総代、内外紳士等燕尾服または支那正服で奉迎した。一方、兒玉総督、後藤民政長官等は二の鳥居内の左側に、神職は同右側にて奉迎した。当日、参列を許されたのは総勢1,083名となった。

(2)　台湾神社鎮座式および大祭典での催し物

10月27日：◆正午12時、圓山公園内の3箇所から打上げられた烟火を合図に各所で余興が始まる。烟火、飛び入り随意の素人相撲、武徳会員の撃剣弓術および本島人の催しによる龍舟競争および奏楽など

10月28日：◆烟火：前日と同じように圓山公園の3箇所にて午前10時から午後10時まで110発打上げ。また、大稲埕本島人および高橋榮寄附による仕掛け花火　◆演劇：台北館および十字館の俳優演劇。芸題は「女将門鎌倉御殿星月夜」、「荘拐平太問答の場」等　◆芸者手踊り：◇東検番・西検番：芸妓および付添総勢140名で、芸妓は手古舞の姿に扮す。神楽獅子に牡丹の花などで装飾した屋台で木遣音頭を唄いながら練り込み、演舞場へ入り込む。浪花楼・日本亭と合流して「高砂踊り」を演じる。続いて、艋舺(ばんか)芸妓の演舞となり、烏帽子に水干狩衣で扮装　◇一力芸妓：芸妓22名、引き子50名および付添40名と共に新起横街を曳き出し、各街を経て神社参拝を終え、演舞に移る

◆鉄道隊工場員数10名：薩摩踊り　◆辰馬商会：烏帽子・直衣で恵比寿の姿に扮した60余名は、鯛を抱えたり、吊竿を持ち、恵比寿ビール3輛を曳き出す　◆大稲埕有志：揃いの浴衣に花笠による山車　◆城内雑貨商会組合員：樽輿・俵輿を肩に、法被姿で担ぎ出す　◆元西街1・2丁目：大八車を装飾し、燈籠を吊るし、三味線と太鼓で囃し練り出す　◆元府後街：牡丹花で飾った釣屋台

◆消防夫：揃いの法被に「木遣り節」で山車を出す　◆一力の芸妓：切り下げ髪の仕丁姿となり、余興場で「高砂踊り」を演じる　◆陸軍奉納の騎芸：旧練兵場にて2騎および3騎連合による隊列集散運動、打球赤白で10名互いに分かれて相手の球取り、馬場での撃剣、曲乗り、戴嚢競馬

《本島人奉納余興》

◆龍舟競争：明治橋下より船橋までの間、大小4艘の船と漕手354名で行う　◆奏楽：小蒸気一艘に楽師男女各8名が搭乗し、清鼓、簡板、北琶、月琴、夜胡琴、戦鼓、胡琴、三絃、洋琴、簫などを用い、「大天官」、「四郎探母」、「大拝壽」、「女帝城」外12曲を合奏して湖畔を上下　◆女優演劇：山仔脚火車頭付近に舞台を設け女優16名にて芝居を演ず　◆弄獅（獅子舞）の演舞：大龍洞武榮原址での武徳会員48名　◆大龍洞演劇と演武：大龍洞市民は女優14名の演劇および武徳会員操演（弄獅武器を携えて拳法をなす）の催し

III　台湾神社典の催し物の変容

台湾神社では、表祭りと陰祭りが隔年に執り行われた。大正6年頃までは、表と陰祭りの区別が明確にされていたが、その後、第7代明石元二郎の死去（大正8年）、大正天皇の病気の悪化（大正10年）、関東大震災（大正12年）、鎮座25周年記念（大正14年）、大正天皇の御諒闇（昭和2年）、鎮座30周年記念（昭和5年）などにより、表と陰祭りの区別が無くなってしまったようである。

昭和天皇の御大典（昭和3年11月）以降は、鎮座30周年（昭和5年）、国民精神作興10周年（昭和8年）、昭和11年から始まった皇民化運動、昭和12年に勃発した支那事変、そして大東亜戦争下では、市民のみならず、全島民に希望、勇気、団結力を与える催し物が大いに盛り込まれた。

明治40年、祭典内容の充実と参拝者の拡大を図るために、遥拝所が新公園（現在の二二八公園）内に設けられ、催し物開催場所も当初の圓山公園から新公園に移され、同時に、催し物も宵宮と本祭に分かれて行われた。昭和11年には、台北市公会堂の落成とともに、催し物は、公会堂と新公園に分かれて行われるようになる。

催し物は城内の街町だけのものではなく、大稲埕や艋舺（後の萬華）に住む本島人による蜈蚣閣や詩意閣などの山車や屋台風のものも祭典を賑わしたが、大正の終わり頃からは全て純日本式に統一されていった。神輿はそれらに替わるものであった。昭和12年には、本島人の大稲埕青年団が神輿の購入を行い、市内を練り廻っ

ている。そして、皇紀2600年にあたる昭和15年には、32基の神輿が練り出された。また、華やかに着飾った各検番の芸妓による手古舞姿や手踊りは台北市民のみならず、余興を見るために各地から台北に集まった人々を大いに虜にしたに違いない。

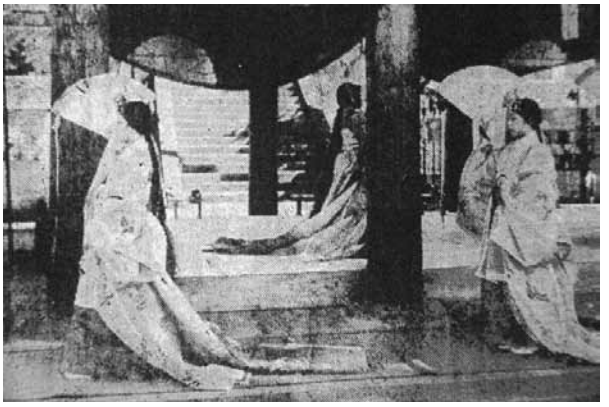

写真３　神楽「浦安の舞」を演じる樺山国民学校児童
（出典：昭和17年10月28日　台湾日日新報）

《主な年代別特徴と催し物内容》

年代	特徴	催し物内容	備考
明治35年	陰祭り	■目立った催し物はなし	
明治36年	本祭り	■城内の街全てからの余興あり、城外の大稲埕や艋舺での催し物もあり	
明治37年	陰祭り	■市民側の余興などの催しは計画されず	日露戦争勃発
明治38年	・5年目の祭典で、第3回目の本祭り ・参拝者数43,900人	■能楽が催され、初めて神輿の渡御　■原住民の参拝　■本島人による芸妓閣や蜈蚣閣が練り出される　■初めて大阪相撲の興行	日露講和条約の締結
明治40年	御旅所が新公園内の遥拝所に設けられて祭典	■宵宮と本祭りに分かれる　■蕃人踊りが披露	
明治41年	・閑院宮（かんいんのみや）載仁（ことひと）殿下が参拝 ・陰祭り	■目立った催し物はなし	基隆・高雄（旧打狗）間を結ぶ縦貫鉄道が全通（4/20）
明治42年	本祭り	■本島人の催しが更に多彩になり、数多くの詩意閣、蜈蚣閣などが出される	従来の20庁制度を廃止して12庁制度となる
明治43年	陰祭り	■特に大がかりな余興はなし	日韓併合条約調印
大正元年	明治天皇の御諒闇	■主だった催し物はなし	明治天皇崩御（7/30）
大正2年	御旅所が新築	■数多くの屋台が繰り出される　■新公園内の音楽堂で奏楽が行われる	羅福星（らふくせい）事件の首謀者以下921人が検挙される
大正4年	陰祭り	■大正天皇の御大典（11/10）と大祭の期日が余りにも接近したため、特に大がかりな余興は執り行われず	・タニバー（西来庵（せいらいあん））事件発生　・総督府新庁舎上棟式
大正5年	遥拝所前に鳥居が設けられる	■旅芸人（雷雀一行）が初めて来台	台中大地震発生
大正6年	・北白川宮成久殿下同房子妃殿下が渡台　・陰祭り	■陰祭りにも関わらず盛大な祭典が催される ■茶楽一派による喜劇が開催	
大正8年		■第7代総督明石元二郎が重体のため、騒がしさだけは押さえて余興の準備がなされる　■人出は少なく、例年の1/3程度　■活動写真の上映	明石元総督が逝去（10/27）
大正10年		■大正天皇の病気悪化もあり、祭典は全体的に静か。また、大正天皇の平癒祈願も含めて、一部の市街では大幟が立てられる	
大正12年		■各町での催し物も余興は費用をかけず控えめ	・皇太子殿下（後の昭和天皇）が摂政の宮として行啓（4/16～4/27）　・関東大震災発生（9/1）　・国民精神作興に関する詔勅発令

大正 14 年	・鎮座 25 周年祭典　・遥拝所前に大鳥居が設けられる	■鎮座 25 周年を祝って町内からの寄付も例年の 4 倍にあたる 2,500 ～ 2,600 円が集まり、盛大な催し物が繰り広げられる	始政 30 周年記念展覧会開催
大正 15 年	北白川宮大妃殿下の渡台があり、10/28 の鎮座祭に参拝	■大妃殿下の奉迎のための装飾も加わり、城内は勿論、大稲埕や萬華地区もお祭りムードで一色となる	大正天皇崩御（12/25）
昭和 2 年	大正天皇の御諒闇	■極めて簡素に行われ、大げさな余興は一切なし。市内は喪章を附した国旗と献燈を掲げる	世界恐慌勃発
昭和 5 年	鎮座 30 周年祭典	■盛り沢山な催し物が挙行　■ラジオで全島に放送される　■音楽会が大いに盛り上がる　■純粋な日本式祭典	霧社事件発生
昭和 9 年	昭和 8 年 11 月の国民作興 10 周年の翌年の例祭	■コロンビア蓄音器会社のレコードが流され、この伴奏で音頭、手踊り　■南カフェー組合女給有志による手踊り　■ 20 余組の神輿が繰り出される　■映画内容は時代劇と漫画	日月潭水力発電所工事の竣工
昭和 10 年	・台湾博覧会のため、新公園内の台湾神社遥拝所は設けられず　・参拝者数 45,000 名	■益々台湾の前途を期待する中で、お祭り景気が盛り上がる	・日本政府の国際連盟脱退 ・始政 40 周年記念台湾博覧会（10/10 ～ 11/28）
昭和 11 年	遥拝式は台北市公会堂（現在の中山堂）横の北白川宮殿下遺蹟記念碑前の式場で行われる	■南カフェー組合女給の大行進　■武術大会の開催　■歌謡曲、喜劇、漫才などの娯楽番組も含まれた　■本島人による樽神輿の繰り出し	・第 17 代総督小林躋造、台湾の皇民化・工業化・南進化の方針をたてる。「皇民化運動」を推進　・台北市公会堂落成式
昭和 12 年		■支那事変（日中戦争）により催し物の華やかさはなくなる	・支那事変により、上海戦で大場鎮が陥落（10/26）し、翌日には廟行鎮や江湾鎮も陥落　・国民精神総動員、実施要綱の発表
昭和 13 年	第一会場は公会堂、第二会場は新公園音楽堂となる	■戦争勝利により祭典は歓喜の坩堝と化した。28 日は全島一斉に祝賀の旗行列・提燈行列がなされ、祭典が一層賑やかとなる　■時局に相応しい催し物　■第二会場では吹奏楽が演奏	支那事変 2 年目であり、10/21、広東が陥落する。10/27、武漢三鎮（武昌、漢口、漢陽）が陥落
昭和 15 年	鎮座 40 周年祭典	■ 32 基の神輿が練り出される　■数多くの神賑行事が神社境内で執り行われる　■島根神楽が初めて奉納　■日本刀の鍛錬火入式	皇紀 2600 年にあたり、各種奉祝行事が行われる
昭和 16 年	・臨戦下、祭典は厳粛を旨とするとの通達あり　・参拝者数 10 数万名	■神樂「浦安の舞」が初めて神賑（しんしん）行事として舞われる　■神輿の渡御はなし	台湾人陸軍志願兵 8,000 人を突破
昭和 17 年	・大東亜戦争下の初めての例祭　・参拝者数 15 万名	■神輿の渡御は止めて、各町内に奉安所を設ける　■奉納催しは、厳粛を旨とされる	第一回高砂義勇隊が編成
昭和 18 年		■米英敵性音楽の排除により、純日本式の音楽のみ　■神輿の渡御は行わず、奉安所に安置しただけ　■第一会場では歌謡曲が軍国歌謡となる	国民動員体制の強化、戦時食料増産、戦力増強のための企業整備、重要軍事後方施設の構築促進